

[Research Report]

Effectiveness of community child-care salon

— Study by questionnaire to mothers and administrators of the salon —

Rika Michioka*, Yuko Nakamura*, Miyuki Okada*, Ayako Nakamura* and Kimihisa Nomura**

* Aino Gakuin College

** Aino University

Abstract

Recent changes of social circumstances, such as decrease in the number of children and family members and lessening of a sense of community have remarkably influenced mothers in bringing up their children. In M city, the Civil Service Section has been frequently consulted by low-confidence mothers regarding the proper care of children. To solve such problems, community child-care salons have been held informally at several areas in the city since 2002 by administrators, social workers and volunteers. One of the important purposes of this activity is to focus on the development of human relationships within the community through taking care of children.

We have examined opinions about this activity by means of questionnaire to the mothers and administrators.

The results are as follows. The mothers may take more interest in community affairs because of the support received from participants in the child-care salon, while administrators would gain a better understanding of these mothers than they had previously.

It is expected that the community child-care salon will play an important role in the improvement in human relationships within the community.

Key words : child-care support, mother, social worker, counselor for children

地域における子育てサロンの有効性

——参加者と運営者へのアンケート調査を通して——

道岡里佳*, 中村優子*, 岡田美友紀*
中村彩子*, 野村公寿**

【要旨】 少子化, 核家族化, 地域連帯感の希薄化などの社会環境が, 育児中の母子に与える影響は大きい。M市においても育児に自信がもてない母親からの相談が多く, その解決方法の一つとして地域内交流に重点をおき, 民生委員児童委員が中心となって子育てサロンを立ち上げた。今回, 私たちは子育てサロンに参加している母親と運営している民生委員児童委員およびボランティア(以下運営者とする)に対し, アンケート調査を行った。アンケート結果から母親は子育てをサポートしてくれる仲間が地域にいると感じることで, 地域への関心が高まっていると考えられた。一方, 運営者は子育て中の母親に対するイメージが, 子育てサロンの運営に携わる前に比べて良くなっていると考えていた。これらは, 地域内交流につながるものであり, 子育てサロンはその役割を果たしていると考えられる。

キーワード: 育児支援, 母親, 民生委員, 児童委員

I はじめに

わが国の現在の社会において子育てを困難にする要因として, 武内¹⁾は子どもや母親個人の問題だけでなく, 子育てを困難にする社会的・文化的状況が出現してきている。特に, 核家族化に伴う, 家族内の潜在的サポート力の低下や母親への育児負担の集中, 子育てに役立つ知識や技術が伝承されないことがあげられる。更に, 地縁的関係の希薄化や近所づきあいの少なさから生じる閉鎖的な「密室育児」の問題がある。家庭内でも地域内でも母子が孤立し「孤独と不安の育児」に陥る危険性が高くなっていると述べている。難波²⁾によれば, このような社会的環境の変化に育児をしてい

る母親が適応していくには, 母親個人の努力・成長と同時に社会的な子育て支援のシステムが不可欠である。

M市においても, 核家族のため自分の親あるいは配偶者の親から育児の知識や技術が伝えられないことから生じる母親からの相談が多く, 育児についての対応は依然として重要な課題となっている。これら育児に関する相談の解決方法の一つとして, M市は地域で孤立しがちな母親たちに接触・交流の場を与えるための地域内交流に重点をおき, 地域全体で子育てできるまちづくりを目指している。

そのような状況から, 母親の孤独(閉じこもり)からの解放, 母親の仲間づくりに視点をおき, 平成14年度から民生委員児童委員(二つの委員を兼ねた職

* 藍野学院短期大学専攻科(地域看護学専攻)

** 藍野大学

名)が主体となり、子育てサロンを開催している。このサロンは、保健活動の一環として保健師からの提案で、民生委員児童委員がボランティア活動として開催・運営しているもので、市の予算で行なっている事業ではない。開始年度はN小学校地区、Hi小学校地区のみであった子育てサロンが、平成15年度に入りMm小学校地区、I地区、Ha地区、S小学校地区、T小学校地区、Mo小学校地区へと急速な広がりを見せられている。

子育てサロンの主な目的は、母親の孤独(閉じこもり)からの開放と母親の仲間作りである。またその内容は、親子で触れ合いながらの手遊び、保健師や著者ら学生(当時)が参加したときは親子に交わっての手遊び、その時期に適した健康に関する話題、ボランティア手作りの玩具での遊び、母親同士の会話・交流などである。

今回、私たちは母親と育児を終えた世代のボランティアの方々が接している子育てサロンを通し、参加している母親(以下参加者とする)と運営している民生委員児童委員・地区福祉会等のボランティア(以下運営者とする)それぞれの意識の変化について興味をもった。

そこで、参加者と運営者の育児・地域に対する意識の変化についてアンケート調査を行った。本調査を通して、地域における子育てサロンの有効性について考察したので、ここに報告する。

II 対象と方法

- 1 調査対象：M市で子育てサロンに参加している母親56名、子育てサロンを運営している地域の民生委員児童委員・地区福祉会等のボランティア17名
- 2 研究期間：2003(平成15)年8月18日・10月20日：N小学校地区
2003(平成15)年9月10日：I地区およびHa地区
2003(平成15)年10月30日：Hi小学校地区
- 3 研究方法：吉田ら³⁾、吉野ら⁴⁾の先行研究とM市での現状を踏まえてアンケートを作成した。子育てサロン開催日に参加者、運営者に対してアンケート用紙を配布し、その場で回答を回収した。回収率は100%であった。

4 調査内容：

参加者に以下の項目について質問をした。

属性(年齢、職業、家族形態、子どもの年齢)
参加開始時の状況(育児の相談相手、サロンを知った方法、子どもの月齢、参加理由)
参加してよかったこと(子ども・母親自身・地域内交流の項目に分けて質問)

参加者間の交流の有無・状況

参加後の育児に対する考えの変化

運営者に以下の項目について質問をした。

属性(性別、生まれた年代、職業)

育児経験の有無

運営に参加しようと思った動機

運営に参加した後の自分の変化

運営前後の子育て期の母親に対するイメージ

III 結 果

1 参加者について

アンケートを実施した時点での各地域の開催回数は、N小学校地区が通算13回、Hi小学校地区が通算9回、I地区とHa地区はどちらも通算2回であった。参加回数については多い順に、1回目15名、3回目10名、2回目9名と参加回数が3回以内のものが全体の60.7%であった。

参加者の属性・背景については、年齢は多い順に、30代前半が28名(50.0%)、20代後半が12名(21.4%)であった。職業は多い順に、職業を持っていない人が50名(89.3%)、フルタイムの仕事に従事している人が4名(7.1%)、パートタイムの仕事に従事している人が2名(3.6%)であった。家族構成は、夫、子ども以外の家族と同居している人は2名(3.6%)にすぎず、54名(96.4%)と圧倒的多数が核家族世帯であった。

参加者が子育てサロンを知った方法は多い順に、友人の紹介20名(35.7%)、乳幼児健診で配布していたチラシ15名(26.8%)、社会福祉協議会の発行する「社協だより」と市の広報誌15名(26.8%)であった。

また、参加者に育児について相談できる身近な人について尋ねたところ、配偶者44名(78.6%)、自分の親41名(73.2%)、近所の同世代の人25名(44.6%)の順であった。

参加者に、参加してよかったことについて、子ども・母親自身・地域内交流の項目に分けて質問した。子どもについては多い順に、楽しい時間をすごせた

43名(76.8%)、子どもが集団に慣れた17名(30.4%)であった。母親については多い順に、楽しい時間を過ごせた44名(78.6%)、育児の情報交換ができた31名(55.4%)、子どもとの関わり・遊び方が学べた21名(37.5%)であった。地域内交流については、他の子どもにも目がいくようになった41名(73.2%)、地域のいろいろな行事に関心が向くようになった24名(42.9%)、近所の人が声をかけてくれる23名(41.1%)であった(表1)。

参加後の参加者間の交流について、あると答えた人は26名(46.4%)、ないと答えた人は21名(37.5%)であった(表2)。交流があると答えた人にどのような交流があるか聞いたところ多い順に、外出や散歩、外遊びに行く20名(35.7%)、メール交換をする17名(30.4%)、育児の相談をしたりされたりする16名(28.6%)であった(表3)。

子育てサロンに参加したきっかけは多い順に、子どもを集団に慣れさせたい37名(66.1%)、育児の情報交換がしたい31名(55.4%)、子どもの友達を増やしたい30名(53.6%)であった。

2 運営者について

運営者の属性・背景については、女性14名(82.4

%)、男性3名(17.6%)、生まれた年代は多い順に、昭和10年代9名(55.7%)、昭和20年代、昭和1けたともに3名(18.6%)であった。これまで従事していた職業は多い順に、主婦7名(43.3%)、会社員4名(24.8%)であった。育児経験の有無については全員があると答えた。子育てサロンのボランティアに参加しようと思った動機については多い順に、民生委員児童委員・地区福祉会の役員だったから13名(76.5%)、地域の中で子育てを支援する必要性を感じたから10名(58.8%)、近所の若い世代の子育てを手助けしなかったから8名(47.1%)であった。

運営後の自分の変化については、現代の子育ての状況が理解できた11名(64.7%)、子育てサロンを運営している世代の人たちと互いに声をかけ合うようになった9名(52.9%)、育児に対する他の世代の考えが理解できた8名(47.1%)であった(表4)。

育児をしている母親に対する運営前のイメージについて尋ねたところ、育児情報が氾濫しすぎてどの情報が正しいのか分からない様子14名(82.4%)、精神的にしんどそう10名(58.8%)、子育てについて相談する人がいない様子9名(52.9%)であった(表5)。

運営に参加したあと、育児をしている母親についてのイメージは、思っていたより子育てを頑張っている13名(76.5%)、子育てを楽しんでいる8名(47.1%)、話しやすい5名(29.4%)であった(表6)。

表1 子育てサロンに参加してよかったこと(地域内交流など)

	計	
	人数	%
他の子どもにも目がいくようになった	41	73.2
地域のいろいろな行事に関心が向くようになった	24	42.9
近所の人が声をかけてくれる	23	41.1
子育てしやすい地域だと思ようになった	16	28.6
近所の人に声をかけるようになった	12	21.4
近所の子どもに声をかけるようになった	12	21.4
子育てサロンのボランティアの人や近所の人に子育てのことを相談できる	12	21.4
民生委員児童委員の人と話す機会が増えた	8	14.3
育児書や同世代の母親からでは得られないことが他世代から得られた	8	14.3
他世代の人の考え方が理解できた	2	3.6

複数回答 N = 56

表2 子育てサロン参加後、参加者間の交流の有無

	計	
	人数	%
ある	26	46.4
ない	21	37.5
わからない	3	5.4
無回答	6	10.7

N = 56

表3 子育てサロン参加後、参加者間での交流状況

	計	
	人数	%
外出や散歩、外遊びに行く	20	35.7
メール交換をする	17	30.4
育児の相談をしたり、されたりする	16	28.6
お互いの家に遊びに行く	9	16.1
育児以外の相談をしたり、されたりする	7	12.5

複数回答 N = 56

表4 子育てサロン運営後、運営者の意識の変化

	計	
	人数	%
現代の子育ての状況が理解できた	11	64.7
子育てサロンを運営している世代の人たちと互いに声をかけあうようになった	9	52.9
育児に対する他の世代の考えが理解できた	8	47.1
他世代の人たちと互いに声を掛け合うようになった	6	35.3
他の地区の民生委員児童委員から子育てサロンについて情報交換・相談されるようになった	3	17.6
子育てサロンの参加者から育児以外の相談を受けるようになった	2	11.8

複数回答 N = 17

表5 子育てサロン運営前に運営者が子育て期の母親に対して抱いていたイメージ

	計	
	人数	%
育児情報が氾濫しすぎてどの情報が正しいかわからない様子	14	82.4
精神的にしんどそう	10	58.8
子育てについて相談する人がいない様子	9	52.9
子どものしつけができていない	8	47.1
昔より恵まれている	7	41.2
子育てを楽しんでいる	5	29.4
母親のマナーが悪い	5	29.4
自分で解決する力がない	5	29.4
肉体的にしんどそう	3	17.6
甘えている	2	11.8
孤独	2	11.8
生き生きしている	1	5.9
わがまま	1	5.9
経済的にしんどそう	1	5.9

複数回答 N=17

表6 子育てサロン運営後に運営者が子育て期の母親に対して抱いたイメージ

	計	
	人数	%
思っていたより子育てを頑張っている	13	76.5
子育てを楽しんでいる	8	47.1
話しやすい	5	29.4
子育てについて相談する人がいない	4	23.5
思っていたほど、子育て中の人は悩んでいなかった	4	23.5
昔より恵まれている	3	17.6
育児情報が氾濫しすぎてどの情報が正しいかわからない様子	2	11.8
肉体的にしんどそう	2	11.8
精神的にしんどそう	2	11.8
孤独	2	11.8
自分で解決する力がない	1	5.9
生き生きしている	1	5.9
母親のマナーが悪い	1	5.9

複数回答 N=17

IV 考 察

育児について相談できる身近な人としては、配偶者78.6%、自分の親73.2%と4分の3程度の人がいると答えているが、逆にいえば約4分の1の人が身内に相談相手がないことになる。これは核家族が96.4%を占めていることと関連すると思われる。相談相手としての、近所の同世代の人がいるのは44.6%であるが、その割合を高めることも子育てサロンの地域内交流の目的である。

子育てサロンに参加してよかったことについて、母

親からみて子どもは、楽しい時間をすごせた76.8%と回答していた。母親自身については、楽しい時間をすごせた78.6%、育児の情報交換ができた55.4%と回答していた。子育てサロン参加後の参加者間の交流状況では、外出や散歩、外遊びに行く人が35.7%、お互いの家に遊びに行く人が16.1%、情報交換状況は、メール交換をする人が30.4%、育児の相談をしたりされたりする人が28.6%おり(表3)、今後、子育てサロンの開催回数が増えるにつれてこれらの比率が高まることが期待される。以上のことから、子育てサロンに参加したことで、参加者の子育てに対する考えは良い方向に向かったと考えられる。原田⁵⁾は母子クラブについて、自分(母親)の生活を新たに作り直すという体験を与え、子どもと2人だけで過ごすことの多い母親にとっては、人と社会とのつながりを回復し社会的な存在として自己を回復させると述べている。このことから、子育てサロンは子育てに楽しみや喜びが感じられる機会が得られる場となっているだけでなく、母親の孤独からの解放にもつながっていると考えられる。

子育てサロンに参加してから、母親の育児に対する考えがどのように変化したかについての自由記述からみると、自分の子どもだけがこんな感じではなくみんなそうなんだということが分かったので、同じ歳の子どもとふれあうのはよいことだと思った、気持ちにゆとりができた、子どものためにいろいろな行事に参加したいと思うようになった、自分の育児の参考や反省材料になるなどの回答がみられた。

地域内交流については、他の子どもにも目がいくようになった73.2%、地域のいろいろな行事に関心が増えようくなった42.9%、近所の人が声をかけてくれる41.1%との回答があった(表1)。これらのことから、地域の中で子育てをサポートしてくれる仲間や地域の人々がいると感じることができ、母親自身も地域に目を向けるようになっていくと考えられる。難波²⁾は、地縁・血縁による相互扶助機能が弱まっている現代では、育児の場面においてもクラブメンバーの相互扶助の力が求められる。このメンバー間の交流の深まりは地域の育児支援力を高めるうえでも有効になってくると思われると述べている。子育てサロンは身近な地域で子育てをする仲間や地域の人々と交流をもちながら、地域ぐるみで子育てを行う役割を担っていると考えられる。

子育てサロン参加後の参加者間の交流について、あると答えた人は46.4%、ないと答えた人は37.5%で

あった(表2)。今回調査対象とした地域の子育てサロンの開催回数はN小学校地区が通算13回、Hi小学校地区が通算9回、I地区・Ha地区はともに通算2回であった。このように開催回数の差が大きいためか、参加者の参加回数は3回以内のものが全体の60.7%であった。まだ参加者間の交流には至らない母親も少なくないと思われ、今後、本事業の拡大と開催回数の増加によって更により方向に向かっていくことが期待される。しかし、参加回数が少ない中でも、アンケートの結果から参加者は、子育てサロンに参加することで地域内交流に関する気持ちを変化させ、相互扶助機能を高める機会を持つことができたと思われる。

運営者に子育て期の母親についてのイメージの変化を聞いたところ、思っていたよりも子育てに頑張っている76.5%、次いで子育てを楽しんでいる47.1%との回答が得られた(表6)。このことから、地域内交流までは進んでいないが、参加者は地域への関心を高めており、運営者が抱いている子育て中の母親に対するイメージが良くなっていることがわかった。

石橋⁶⁾は、出産前、私にとっての八千代市は通勤に便利な場所ではなかった。しかし、子どもを産み、育てていく中で「子供-母-地域」の三者が深い関わりをもち、核家族化や少子化が進む現代社会において、この関係がうまくいくことが重要であることに気づいたと述べ、さらに、スタッフの方から声をかけてくれて、職員と利用者というよりも人間と人間の付き合いが出来るため、自分が地域の活動に参加しているという喜びを味わうことができ、地域に対する愛着もわいてくると述べている。

まだ地域に十分浸透していない段階の事業であるが、アンケート結果から参加者・運営者ともに地域・他世代に対する思いは良い方向に変化していることがわかった。このことから、子育てサロンは地域に根ざした育児をしていく上で、今後有効性を発揮していくものと考えられた。

著者らは当初、子育てサロンに参加することによって参加者間の交流が活発に行われ、それを基点に地域交流へとつなげることができると考えていた。しかし、交流があると答えた人は46.4%で予想より低い結果であった(表2)。この研究を通し、地域交流が始まるきっかけは参加者間の交流だけではなく、参加者と運営者の関わりの中でも生まれることがわかった。

今回のアンケート調査では、参加者の参加回数が3

回以内である理由については、結果を得ることができなかった。この点に関しては、今後さらに追跡調査・研究を進めていくことが必要ではないかと考えられる。

今回の調査、研究で以下のことが得られた。①子育てサロンは母親にとって孤独(閉じこもり)から解放される場になりうる。②子育てサロンは身近な地域で子育てする仲間や地域の人々と交流をもちながら、地域ぐるみで子育てを行う役割を担っていると考えられる。③参加者間および参加者と運営者間の交流が進み、その交流がさらに地域に広がることが地域の育児支援力を高めることにつながると思われる。④地域全体で子育てを支援するまちづくりのために世代間の交流が深まる必要がある。

子育てサロンはまだ始まったばかりの活動である。しかし、今後回数を重ねることによって参加者間、参加者・運営者間の交流が活発になり、さらには地域交流の発展に寄与できる可能性を十分持っていると考えられる。

謝 辞

本研究を行うにあたりアンケート調査を快く受けてくださった民生委員児童委員とお母様方ならびにご指導・ご助言を頂いた府および市の保健師の皆様、本研究をご指導いただいた藍野大学の足利学助教授、藍野学院短期大学専攻科の柴田真理子助教授に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 武内珠美：子育てに悩む母親のグループづくり。周産期医学 23(6)：881-884, 1993
- 2) 難波茂美, 松本雅子：地域における母子クラブの有効性について。保健婦雑誌 57(13)：1077-1079, 2001
- 3) 吉田弘道, 山中龍宏, 巻野悟朗, 太田百合子, 中村孝, 山口規容子, 牛島廣治：育児不安尺度の作成に関する研究-1歳半児の母親用試作モデルの検討。チャイルドヘルス 2(2)：45-49, 1999
- 4) 吉野ひとみ, 黒瀬寛子, 保坂はるか, 平林節子, 上田真輝子, 西浦裕子, 佐藤あつ子, 大光房枝：育児グループが当事者および地域にもたらした効果。保健婦雑誌 53(4)：301-307, 1997
- 5) 原田紀子：子育てをしている母親のサポートグループを通したエンパワメント。看護研究 29(6)：497-508, 1996
- 6) 石橋雅子：“すてっぷ21”設立の経緯とこれからの課題。保健婦雑誌 53(4)：281-284, 1997